国道９号線バイパス建設予定地内

埋蔵文化財発掘調査報告書

－Ⅴ－

６２年３月

建設省松江国道工事事務所

島根県教育委員会

序

建設省松江国道工事事務所は、一般国道９号松江バイパスの建設事業を推進していますが、その道路予定地内にある埋蔵文化財のとりあつかいについて島根県教育委員会と協議を重ね、記録保存のための発掘調査を実施しています。その結果、昭和57年の島根国体開催時には延長5.9㎞、また昭和60年にはさらに１㎞をいずれも暫定２車線で供用することができました。

今回の調査は、松江バイパスを完成供用とすべく本線部分の未調査遺跡のうち春日遺跡と平所遺跡について行なったものです。

本報告書が道路事業および道路特定財源がこのような部門にも活用されていることへの御理解の一助なれば幸いです。

最後に、今回の発掘調査は島根県教育委員会に委託して行なったものであり、関係各位の御尽力に対し深甚の謝意を有わすものであります。

昭和62年３月

建設省松江国道工事事務所長

浅　沼　秀　称

序

島根県教育委員会は、建設省中国地方建設局の委託を受けて昭和61年9月から12月まで一般国道9号線松江バイパス建設予定地内の春日遺跡、平所遺跡の発掘調査を実施しました。この報告書はその調査の記録と結果をまとめたものであります。

松江バイパスは現在までに二車線分が完成し利用されていますが、この路線上には多くの遺跡が存在しており、県教育委員会は建設省と協議を重ね、昭和50年度から57年度にかけて、数度にわたる調査を実施してきました。そして今年度は車線拡張に伴ない、前回調査で、溝状遺構が検出された春日遺跡、住居跡・埴輪窯跡が検出された平所遺跡について再度発掘調査を実施しました。その結果、春日遺跡では前回検出した溝状遺構の続きと新たに溝状遺構が2条検出されました。平所遺跡では住居址1軒、土壙4基、柱穴状遺構1基を検出しました。

これらの成果をとりまとめ、一冊の報告書といたしました。本報告書が、松江バイパスを御利用される方々のみならず、広く一般の人々の埋蔵文化財に対する理解と関心を高めることに、多少なりとも役立てば幸いです。

なお、本書を刊行するにあたり、ご協力いただいた建設省松江国道工事事務所をはじめ関係各位に改めて厚く御礼申し上げます。

昭和62年3月

島根県教育委員会

教育長　栗　栖　理　知

例　　言

1．本書は、建設省中国地方建設局の委託を受けて、島根県教育委員会が昭和61年度に実施した一般国道9号線松江バイパス建設予定地内埋蔵文化財発掘調査の報告である。

2．本年度は、平所遺跡、春日遺跡の2遺跡の調査を実施し、それぞれの発掘地は次のとおりである。

1)　平所遺跡 —— 島根県松江市矢田町字平所535－3他

2)　春日遺跡 —— 島根県八束郡東出雲町出雲郷1426－3他

3．調査組織は次のとおりである。

調査指導者　林正久（島根大学教育学部助教授）

事　務　局　熊谷正弘（文化課課長）、安達富治（文化課課長補佐）、蓮岡法暲（同）、矢内高太郎（文化係長）、永塚太郎（埋蔵文化財第1係長）、吉川広（文化課主事）、陶山彰（島根県教育文化財団嘱託）

調　査　員　石井悠（文化課主幹）、川原和人（文化課文化財保護主事）、板垣旭（文化課講師兼主事）、柳浦俊一（島根県教育文化財団文化財主事）、広江耕史（同）、長嶺康典（同嘱託）

4．遺物の実測は桑原真治、板垣、長嶺があたり、浄写は桑原、吉冨恭子、岡村千恵美、瀬田明子、難波純子、中井浩治がこれを行なった。また遺物の写真は長嶺、板垣が撮影した。

5．本書の執筆、編集は、調査員が集団討議してこれを行ない、文責は目次に表記した。

6．本書に掲載した地形図は、建設省国土地理院発行のものを使用した。

7．挿図中の矢印は国土調査法による第Ⅲ座標系X軸の方向を指す。したがって磁北より7°12′、真北より0°32′東の方向を示している。

8．本遺跡出土遺物及び実測図、写真は島根県教育委員会で保管している。

本 文 目 次

Ⅰ．位置と環境 ……（板垣・長嶺） 1
Ⅱ．調査に至る経緯 ……（広江・柳浦） 3
Ⅲ．調査の経過 ……（板垣・長嶺） 3
Ⅳ．遺跡の概要
平所遺跡 ……（板　垣） 4
ＳＩ－01 …… 4
ＳＫ－01 …… 8
ＳＫ－02 …… 8
ＳＫ－03 …… 9
ＳＫ－04 …… 9
Ｐ－01 …… 10
小　結 …… 12
春日遺跡 ……（長　嶺） 13
Ａ調査区 …… 13
ＳＤ－01 …… 14
ＳＤ－01　出土遺物 …… 14
ＳＤ－02 …… 18
Ａ区耕作土出土遺物 …… 18
Ｂ調査区 …… 21
ＳＤ－03 …… 21
Ｂ区耕作土出土遺物 …… 22
小　結 …… 22

I　位置と環境

松江市東南部に展開する意宇川下流平野は意宇川が形成した沖積平野で、出雲地方では有数の穀倉地帯として知られている。その西方にそびえる茶臼山（標高171m）は『出雲国風土記』によれば「神名樋野」とある。今回調査を実施した平所遺跡はこの意宇川下流平野の北部丘陵地帯にあたり、茶臼山の東北麓、南から北に派生する支脈の西側斜面に位置している。また春日遺跡は意宇川下流平野の東南端にあたり、意宇川と須田川に挟まれた湿田中に位置している。

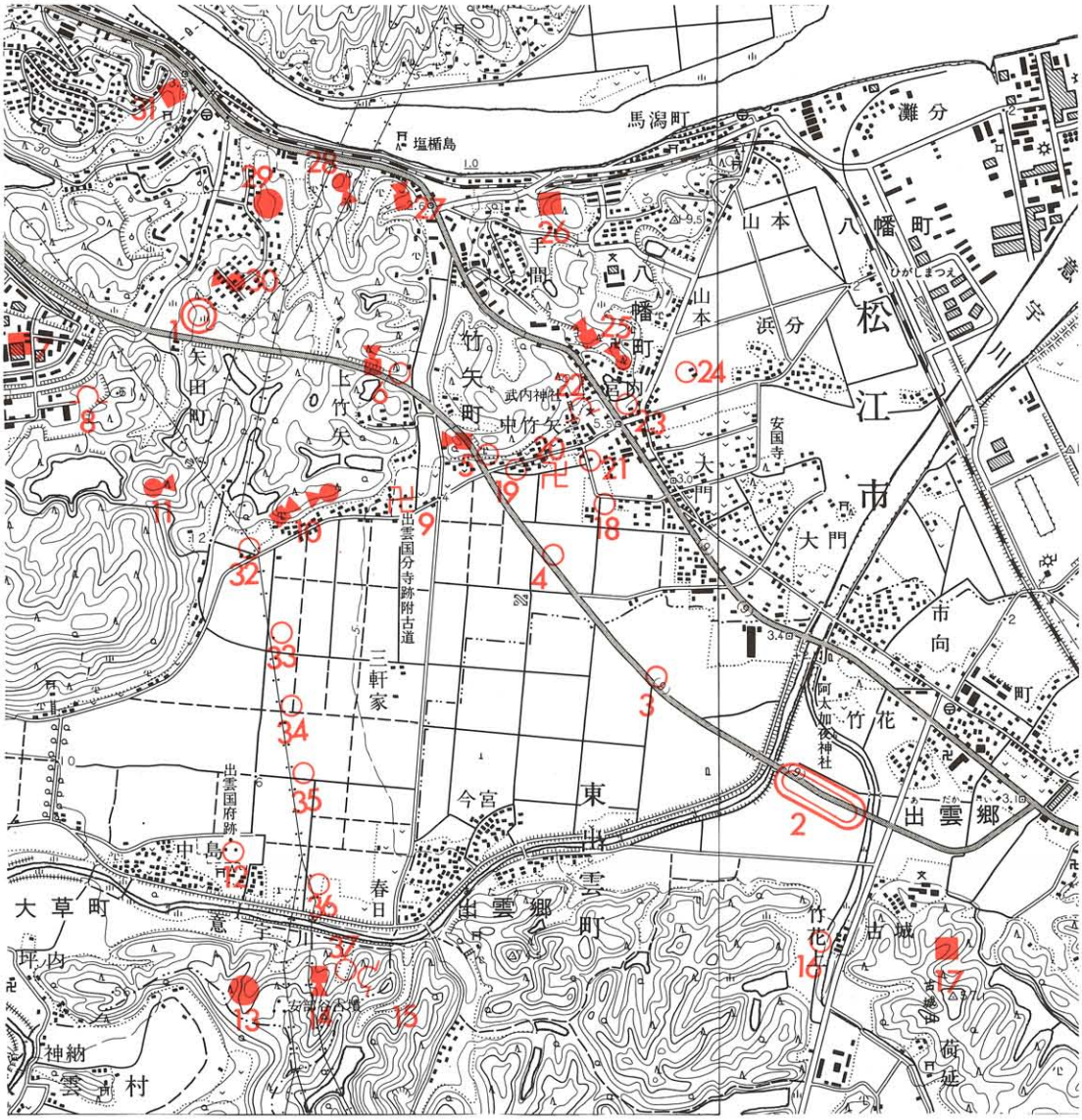
これら2遺跡の周辺で現在よく知られている縄文遺跡は意宇川下流平野の縁辺に点在しており、前期では竹矢小学校々庭遺跡、後期では法華寺前遺跡・才塚遺跡・さっぺい遺跡などがある。また竹ノ花遺跡からは表採資料ではあるが、前期から晩期にかけての土器片が検出されている。

弥生時代の遺跡はさらに平野の中央部へと分布の広がりをみせ、宮内遺跡・布田遺跡・三軒屋遺跡などが存在する。中でも布田遺跡は島根県下ではまれな低地性集落で、特に前期から後期にかけての集落の変遷を知る上で重要な遺跡である。夫敷・上小絞・向小絞遺跡においては後期の水田跡も検出されている。後期後半には的場土壙墓や、四隅突出型の来美墳丘墓の出現をみる。

古墳時代前期の墳墓としては中竹矢遺跡の土壙墓がある。茶臼山の東部丘陵地帯にあたり、その丘陵上から検出されている。中期に築造された古墳は出雲地域でも大形古墳として著名なものが多く、茶臼山の西方山麓には大庭鶏塚（方墳、一辺約42m）、大橋川沿いの丘陵には手間古墳（前方後円墳、全長約70m）・井ノ奥4号墳（前方後円墳、全長約57.5m）・石屋古墳（方墳、一辺40m）・竹矢岩船古墳（前方後方墳、全長47m）などがそれである。後期に大形の山代二子塚古墳（前方後方墳、全長92m）のほか、意宇平野南方丘陵の西百塚・東百塚古墳群のような個々の規模は小さいが数80基を数える大古墳群が形成される。後期後半には横穴式石室をそなえ家形石棺をもつ岡田山1号墳（前方後方墳、全長約24m）らが築かれる一方、石棺式石室をもつ古天神古墳（前方後方墳、全長約25m）・岩屋後古墳（原形不明）・山代方墳（一辺45m）らが出現する。横穴もその影響を受けた安部谷・十王免・狐谷横穴群のような玄室の形態が家形を呈するものが築れる。やがてこれらの横穴の衰退をもって意宇川下流平野に展開した古墳文化は終りをつげる。

律令時代にはこの平野の一角に国庁が設置され、政治上重要な位置を占めたことが知られる。『出雲国風土記』によると、平野とその周辺には国庁だけでなく意宇郡家・意宇軍団・駅・山代郷正倉等の公的施設が配置されたことが記されている。さらに平野の北辺には出雲国分寺・国分尼寺が建立されており、まさに出雲国の中心となっていくのである。

以上述べてきたように、この地域は古代出雲を解明する上で欠くことのできない重要な遺跡密集地である。



第１図　平所・春日遺跡と周辺の遺跡（１：25000）

１．平所遺跡　２．春日遺跡　３．夫敷遺跡　４．布田遺跡　５．中竹矢遺跡中竹矢１号墳
６．才ノ峠遺跡・才ノ峠１号墳　７．来美古墳　８．十王免横穴群　９．出雲国分寺跡
10．上竹矢古墳群　11．廻田古墳　12．出雲国庁前　13．百塚山吉墳群　14．古天神古墳
15．安部谷横穴群　16．竹ノ花遺跡　17．古城山古墳　18．宮内遺跡　19．出雲国分寺瓦窯跡
20．出雲国分尼寺跡　21．平浜八幡宮前遺跡　22．代官家後横穴群　23．的場土壙墓
24．さっぺい遺跡　25．迎接寺古墳群　26．灘山古墳　27．竹矢岩船古墳　28．手間古墳
29．井ノ奥古墳群　30．井ノ奥４号墳　31．石屋古墳　32．間内遺跡　33．上小紋遺跡
34．四配田遺跡　35．神田遺跡　36．大屋敷遺跡　37．天満谷遺跡

II　調査に至る経緯

今回の国道９号線バイパスの調査は、昭和55・56年に行なった漸定道路の残り４車線の本道工部分と矢田町平所遺跡地内の道路改築の部分である。

国道９号線松江東バイパスは、６車線が計画されており、昭和57年に行なわれた島根国体主要関連道路として供用するため、55・56年の２ケ年にわたって合計７遺跡（春日遺跡、夫敷遺跡、布田遺跡、中竹矢遺跡、才ノ峠遺跡、勝負遺跡、石台遺跡）の調査を行なった。その後、60年度に建設省から国道９号線松江東バイパスの残り４車線の調査依頼があり、協議の結果、61年度に春日遺跡を着手することとなった。

当初、61年９月から春日遺跡の調査に入る予定であったが、同９月に、51年調査を行なった平所遺跡において、道路改築工事中に、住居址の一部が確認された。従来考えられた平所遺跡の範囲の東側になるが、同じ平所遺跡の一部と考えられるため建設省と協議の結果、工事を一時中断し、急遽調査に入ることとなった。調査は９月から平所遺跡に着手し、10月から春日遺跡も併行して行なうこととなった。

III　調査の経過

今年度の調査として、春日遺跡は９月24日～同30日において調査区内の客土・表土を重機により掘削した。平所遺跡は９月15日より調査を開始し、また春日遺跡は10月６日より開始した。平所遺跡は10月23日に調査を終了し、調査員は春日遺跡に合流して12月18日には調査の全日程を終了した。

平所遺跡　平所遺跡は９月15日より調査を開始した。同19日にＳＫ－01、02を確認。同24日から実測し、遺物を取り上げる。写真撮影を行なう。同26日より西側斜面の調査にとりかかり、10月６日にＳＩ－01のプランを確認し、同時にＳＫ－03、04も検出した。同７日にＳＫ－03、04の実測を開始し、遺物も取り上げる。同15日にＳＩ－01の出土遺物の実測を始め、同17日写真撮影。同20日にＳＩ－01内より柱穴１個を確認する。他にピット１個を検出した。同23日に調査終了。

春日遺跡　春日遺跡は10月６日より調査を開始した。Ａ区内の精査を行なうと供に７日よりＢ区耕作土の重機掘削を開始する。同29日Ａ区南壁沿いにトレンチを入れる。ＳＤ－01を検出の後に実測し、写真撮影を行なう。11月14日にＢ区南壁土層を実測すると供に調査区内を精査した。ＳＤ－03を検出した後、実測し、写真撮影を行なう。12月11日にＡ区耕作土の残土を重機掘削の際、ＳＤ－02を検出。同16日、17日にＳＤ－02を実測し、写真撮影を行なう。同18日に調査全日程を終了。

Ⅳ　遺跡の概要

平所遺跡

当遺跡は低丘陵の頂上部及び西側斜面一帯に位置し、標高は35.0mから43.0mを測る。今回の調査で検出された遺構は、竪穴住居址１、土壙４、ピット１である。竪穴住居址は西側斜面の下部より、その他ほぼ尾根の頂上部に位置する。出土した遺物は、竪穴住居址からは主に弥生土器・土師器。ＳＫ－03とＰ－01及び調査区内からは須恵器が、ＳＫ－01からは弥生土器の破片が出土している。

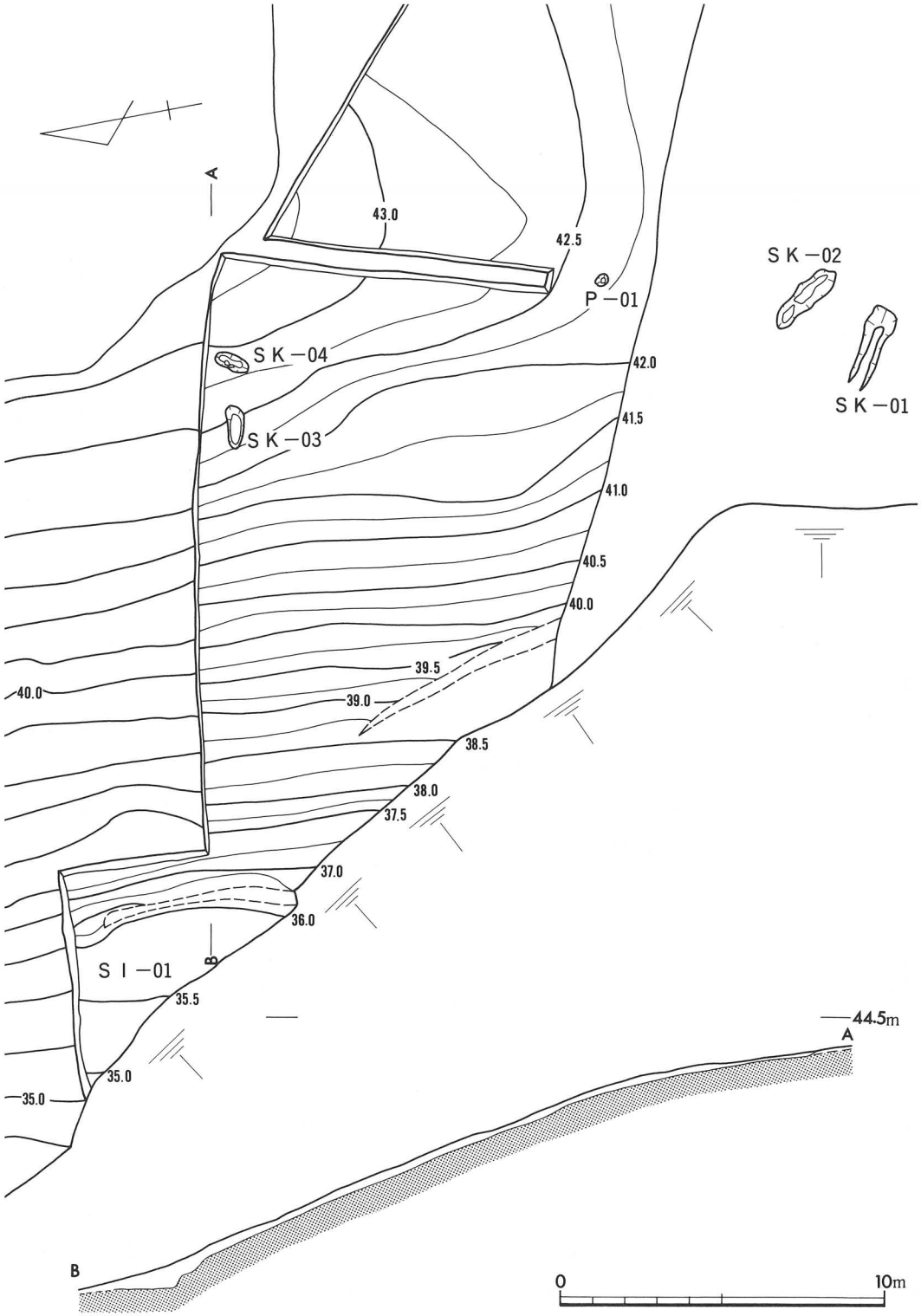
なお、当遺跡は以前の発掘調査より、玉作工房跡や埴輪窯跡が確認されている。(註１) 特に埴輪窯跡は県内では例がなく、形象埴輪の出土した例も少ない。今回も、これらのことを十分考慮した上で調査を行なったが、それに伴う遺構・遺物は検出しえなかった。

ＳＩ－01

ＳＩ－01は、調査区西斜面の急傾斜からなだらかになる傾斜変換点に位置している。標高は35.0mで今回設定した調査区の最も西側にあたる。さらに南西側は道路工事によって削られ消滅している。住居址は従来、隅丸方形プランを呈すと考えられるが、現存では南北5.8m・東西３mを測るのみである。住居址内の土層は上層からみると、３cm程度の簿い腐植土（表土）、黒茶褐色土が約13cmと、さらにその下層には黒褐色土が約15cm、黄褐色土が約30cm、やや簿い黄茶褐色土が約15cm堆積していた。壁は東側のみ残存しており、壁高は40～50cmを測る。床面の中央やや北西寄りにピット２穴（以下P_1、P_2とする）が認められた。P_1は、直径50cmの楕円形プランを呈し、深さは25cmで平底をなす。P_2は長径60cm・短径48cmを測り、やはり楕円形プランを呈す。深さは20cmで、断面擂り鉢状をなす。P_1・P_2とも薄い黄茶褐色土が堆積しており、覆土中から遺物の出土はみられない。P_1は壁もしっかりしており、底部から考えても柱穴とみてよかろう。P_2は柱穴とは認め難いが、住居址に関連したものと思われる。

遺構内より出土した遺物は、弥生土器・須恵器・石鏃などである。特に弥生土器は遺構内東部及び南東部から、覆土中よりまとまって出土している。注目すべきは南東部で出土した壺片と底部で、遺構床面に倒置した状態で検出された。

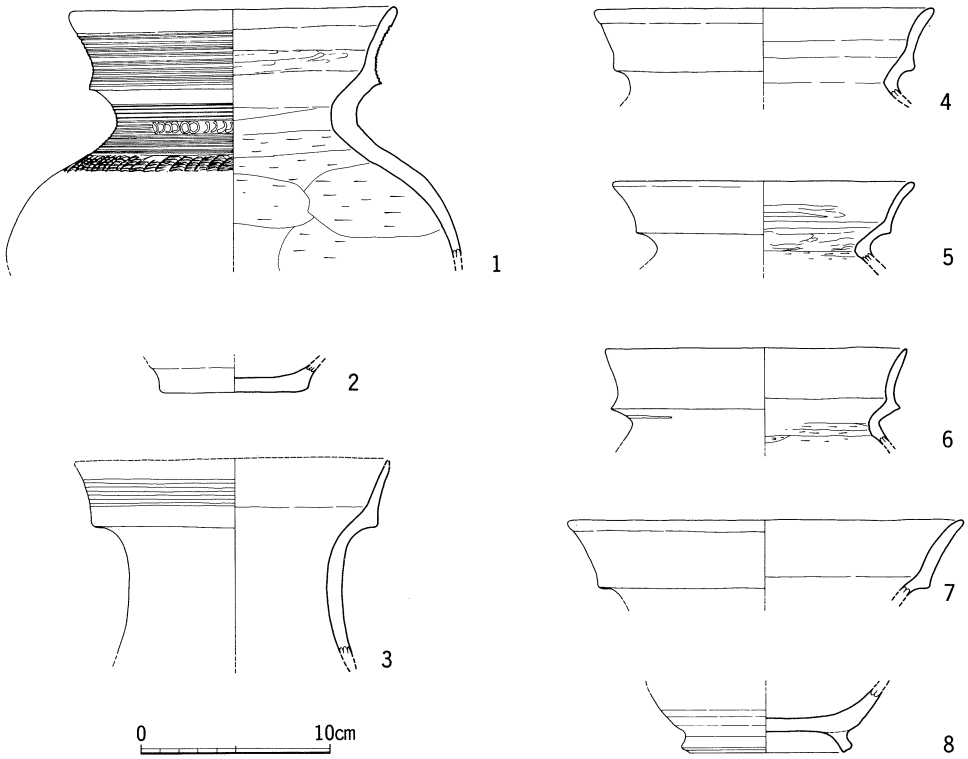
出土遺物の主である弥生土器片は、量は豊富であるが完形に復し得るものはない。第４図の１～３は住居址の床面より、４～８及び第５図の石鏃は覆土中より出土している。１の壺は、住居址の床面に倒置した状態で出土したものである。口径は17cmを測り、複合口縁を有するもので、頸部はやや長く、ゆるやかに屈曲する。口縁部は内側に段を持ち、外反して立ち上がる。端部は丸みを持



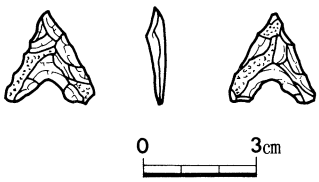
第2図　平所遺跡遺構配置図

第３図　平所遺跡ＳＩ－01　実測図

つ。胴部は肩がよく張り出している。口縁と頸部に２枚貝の貝殻腹縁によると考えられる平行沈線がみられ、頸部にはさらに、竹管による刺突文を施している。この刺突文は頸部を巡らない。肩部は同じ施文具と思われる貝殻で押し引き状の刺突文を施しており、胴部はナデている。口縁部は内面横方向のヘラミガキ、内面頸部以下はヘラケズリを施している。胎土は密で、砂粒を多く含み、焼成は良好である。色調は赤褐色である。２は、器種不明の底部である。床面直上より出土したもので平底を呈し、底径は7.8cmを測る。内外面とも丁寧なヘラミガキが施されており、胎土は密で、焼成は良好である。色調は外面は褐色・内面は黒褐色である。３も、床面直上から出土した壺である。複合口縁を有し、やや外反して立ち上がる。口縁端部は破損しており、不明である。口縁外面には、二枚貝の貝殻腹縁によると考えられる平行沈線が施されている。外面はナデ調整。内面は口縁がナデ調整で、頸部はヘラミガキを施している。胎土は微砂粒を含み、焼成は良好で、色調は赤褐色である。４～７は甕片である。いずれも無文の複合口



第４図　平所遺跡ＳＩ－01　出土遺物実測図



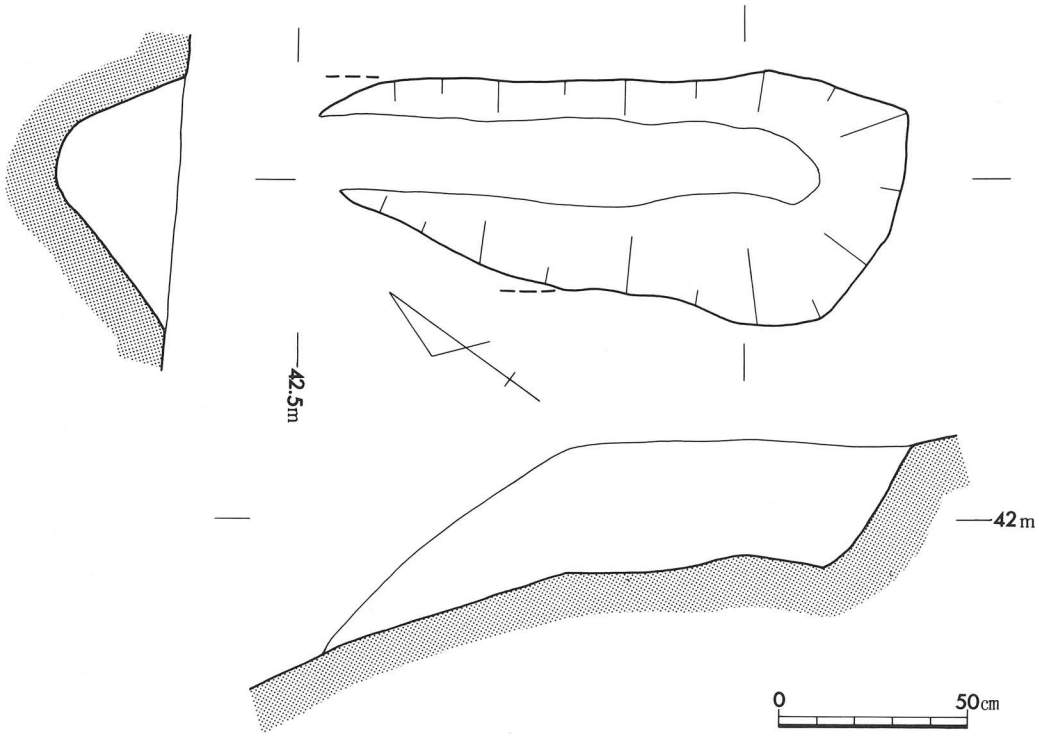
第５図　平所遺跡ＳＩ－01
出土遺物実測図

縁をなす。４は口縁がやや外反して立ち上がり、端部付近でわずかに肥厚して丸くなる。ナデによる調整を施しており、内面頸部以下はヘラケズリがみられる。胎土は粗で、焼成は良好である。色調は黄褐色である。５は口縁がやや外反して立ち上がり、端部付近でわずかに肥厚して丸くなる。口縁外面はナデ、内面はヘラミガキを施し、頸部以下はヘラケズリが見られる。胎土は微砂粒を多く含む。焼成は良好で、色調は赤褐色である。６は口縁がやや外反して立ち上がり、端部は肥厚せずに丸味を持つ。外面・内面ともナデてあり、頸部外面にわずかだがヘラミガキが施されている。内面頸部以下はヘラケズリがみられる。胎土は密で、焼成は良好である。色調は外面が赤褐色・内面は黒褐色である。７は口縁がわずかに外反して立ち上がり、端部は肥厚して丸くなる。口縁下端部はあまり屈曲しない。調整はナデを施しており、胎土は微砂粒を多く含む。焼成は良好で、色調は赤褐色である。８は須恵器の壺の底部である。やや外方に開く高台を有し、高台を貼り付けた後、丁寧にナデを施す。胎土は粗で、微砂粒を含む。焼成は良好で内外面ともに自然釉がかかっている。色調は灰褐色である。第５図の石鏃は、安山岩製である。最大長1.2cm・重量0.11ｇの小形品で、基部は凹む。風化が著しいため詳細は不明である。

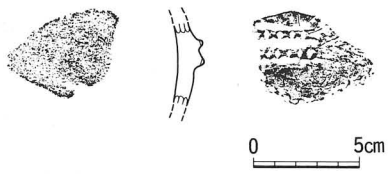
ＳＫ－01

尾根筋が南北に走る丘陵上で、今回設定した調査区の最も南側にあたり、この尾根の西側傾斜変換点付近に位置する。調査区の、表土・黄褐色土を除去し、地山面を精査した時点で確認したもので、南東から北西に主軸を向ける長方形プランを呈し、長径1.5m・短径0.5m・深さは最も深いところで0.32mを測る。この土壙を検出した尾根は、西側斜面へ向けて傾斜しており、北西壁を明確にすることはできなかったが、本来は北西にさらに伸びていたものと思われる。

土壙内には黄褐色のきめの細かい土が堆積しており、その覆土中から弥生土器の壺の胴部と思われる破片が一片出土した。第７図はその土器片で、外面には二条の突帯が巡らされ、さらに二条とも刻めを施してある。胎土は砂粒を多く含み、焼成は比較的良好である。色調はやや黒みをおびた黄褐色である。



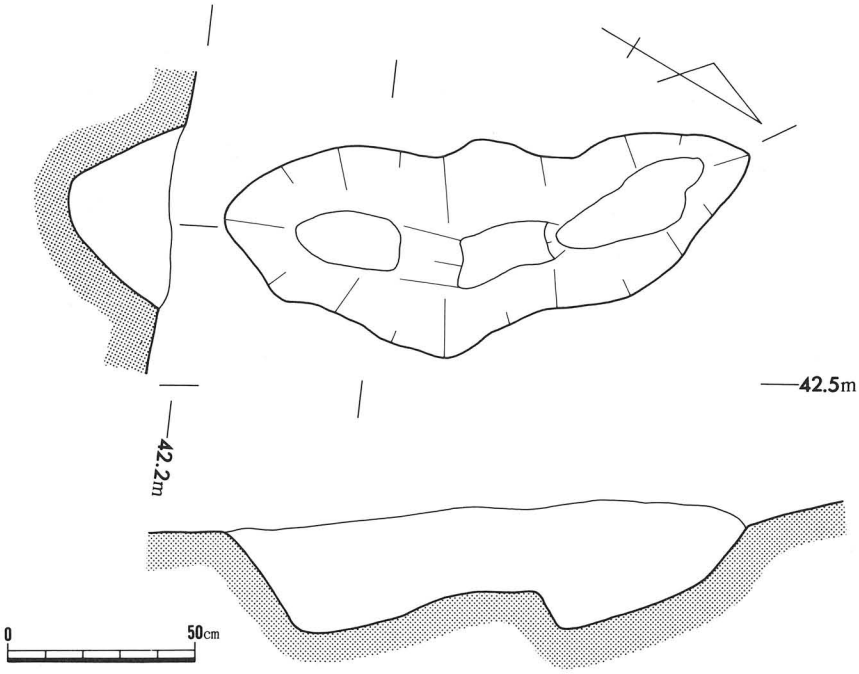
第６図　平所遺跡ＳＫ－01　実測図



第７図　平所遺跡ＳＫ－01
出土遺物実測図

ＳＫ－02

ＳＫ－01の北側で、ほぼ尾根の頂上に位置する。ＳＫ－01と同様、表土・黄褐色土を除去し地山を精査した際に確認したもので、不整な長楕円形プランを呈し、長径1.4m・短径0.4m・深さは最も深いところで0.25mを測る。

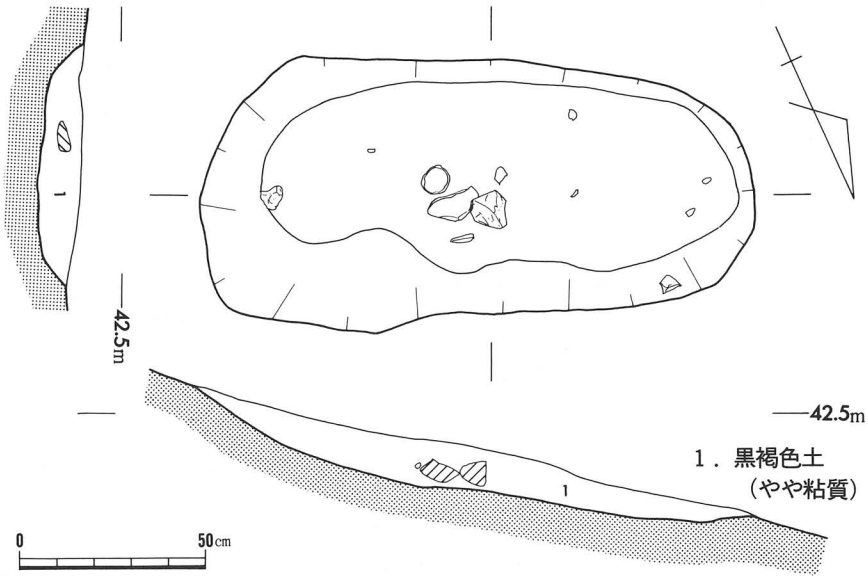


第８図　平所遺跡ＳＫ－02　実測図

土壙内には、ＳＫ－01と同様、黄褐色のキメの細い土が堆積している。この土壙中より遺物は検出していない。

ＳＫ－03

南北に走る尾根筋の西側斜面にあたり、設定した調査区の最も北側で、標高42.5mの地点に位置する。東西に主軸を向ける不整長方形プランを呈し、長径1.45m・短径0.65m・深さは最も深いところでも0.15mの浅い土壙である。床面は東側が高く西側へ向け傾斜し、低くなっている。土壙内にはやや粘質を持った黒褐色土が堆積しており、この土の除去中に、土壙中央部より握拳程度の自然石を３個確認し、さらに小さな自然石を土壙内周辺で数個確認したが、遺物は検出していない。



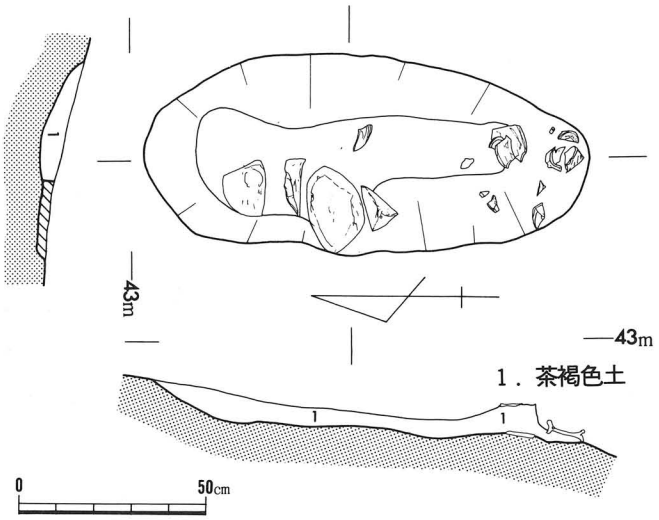
第９図　平所遺跡ＳＫ－03　実測図

ＳＫ－04

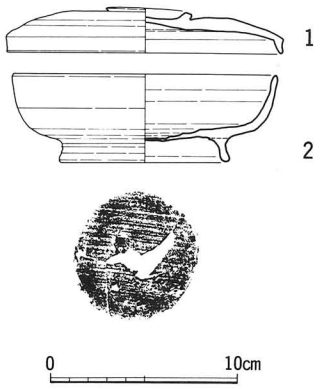
ＳＫ－03のすぐ東側で、標高42.8mに位置する。北東から南西に主軸を向ける平面小判状プ

ランを呈し、長径1.18m・短径0.5m・深さは最も深いところでも0.08m程度の浅い土壙である。土壙内には黄褐色土が堆積しており、床面はほぼ平らである。

土壙南側より須恵器の蓋坏のセットを検出した。第11図１はその蓋で、口径14.5cm・器高2.4cmを測る。輪状つまみを有するもので、つまみは低く、端部はわずかに外反する。口縁端部は直立し、わずかに外方に折れまがる。天井部は回転ナデを施している。胎土は粗である。焼成は良好で、外面にわずかに自然釉がかかり、色調は灰褐色を呈す。２は坏で、口径14cm・器高4.6cmを測る。高台は高く外方に開く。体部は内湾して丸味を有し、口縁端部へ至る。外面にヘラケズリの後にナデて調整してある。底部は静止糸切りにより切り離してあり、高台を貼り付けた際にナデて糸切り痕を消している。胎土は粗である。焼成は良好で、色調は灰色である。



第10図　平所遺跡ＳＫ－04　実測図

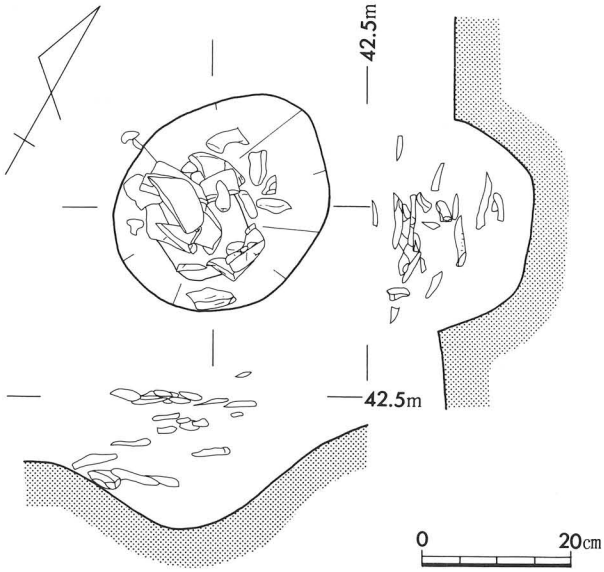


第11図　平所遺跡ＳＫ－04
出土遺物実測図

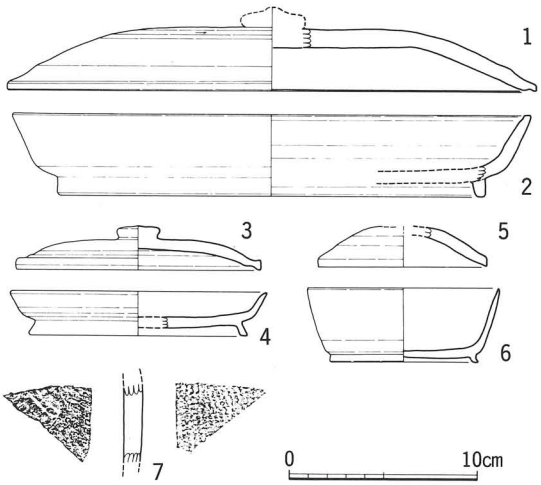
Ｐ－01

南北に走る尾根のほぼ頂上で、ＳＫ－01・02の北側にあたり、標高42.6mの地点に位置する。南北に主軸を向ける楕円形プランを呈し、長径0.31m・短径0.26m・深さは0.11mを測る。ピット内は黒褐色土が堆積しており、その覆土中及びピット上部より須恵器の蓋・坏・盤と甕の体部と思われる破片１片を検出した。

第13図１の蓋は、口径28cmと大形で、器高3.2cmを測る。擬宝珠状のつまみがつくものと考えられ、口縁端部は断面三角形を呈すが鋭いものではない。天井外面には回転ヘラケズリを施す。胎土は砂粒をやや多めに含む。焼成は悪くもろい。色調は白灰色である。２は１の坏である。口径26cmとやはり大きいもので、器高は4.3cmを測る。やや外方に開く高台を有す。胎土は砂粒をやや多めに含む。焼成は悪くもろい。色調は白灰色である。３の蓋は、口径13cm・器高2.4cmを測る。擬宝



第12図　平所遺跡Ｐ－01　実測図



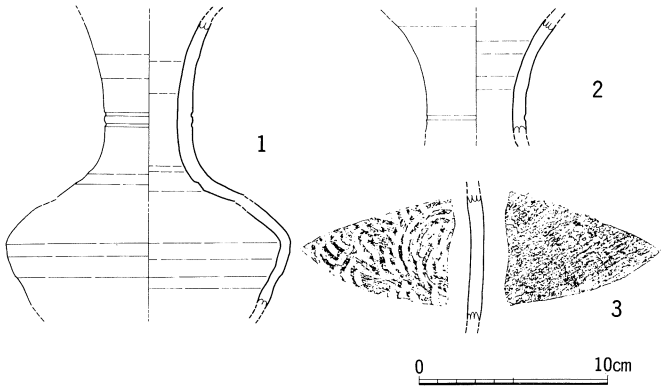
第13図　平所遺跡Ｐ－01　出土遺物実測図

珠状のつまみを有するもので、口縁端部は断面三角形を呈するが鋭いものではない。天井部に回転ヘラケズリの後、ナデている。胎土は粗で、焼成はややあまい。色調は灰色である。４の皿は、口径13.5cm・器高は2.4cmを測る。底部は回転糸切りの後、丁寧にナデてあり、外方に開く高台を貼り付けてある。口縁部は外方へ向いて開いている。胎土は粗で、焼成は良好である。色調は灰色である。底部外面が他の部分と比べて滑らかな所に特徴がある。５の蓋は、口径９cm・器高2.1cmを測る。やや厚めで、口縁端部は極端には屈曲しない。胎土は密であり、焼成は良好で、青灰色を呈す。６の坏は、口径10cm・器高５cmを測る。低い高台を有し、体部は直線的に立ち上がる。胎土は密であり、焼成は良好で、淡青灰色を呈す。７は甕の胴部片である。外面は平行タタキ、内面は同心円状のタタキメが施される。胎土は密であり、焼成は良好で、灰色を呈する。

遺構に伴わない出土遺物

第14図は、遺構に直接伴わない出土遺物である。調査区内の表土・黄褐色土中より出土したもので、いずれも須恵器である。

１は長頸壺である。口縁端部及び底部は破損のため不明である。最大径を胴部に持つもので、15cmを測る。口頸部はゆるやかに外反しながら立ち上がり、くびれ部には２条の沈線が施されている。胴部は肩がやや張り出した作りを示す。器面全体を回転ナデで仕上げており、胎土は密で砂粒を多く含む。焼成は良好で、色調は外面が赤みがかった灰褐色・内面は灰褐色である。２も長頸壺の頸部と思われる。外反して立ち上がり、くびれ部には２条の沈線が施されている。胎土は密で砂粒を多く含む。焼成は良好で、全体に自然釉がかかっており、色調は外面が黄灰褐色・内面は黒味が



第14図　平所遺跡遺構外出土遺物実測図

かった灰褐色である。3は甕の胴部の破片と思われる。外面は平行タタキメが施されていたと考えられるが、自然釉がかかっているため不明である。内面は同心円状のタタキメを施している。胎土は密で微砂粒を多く含む。焼成は良好で色調は外面が黄灰色・内面は灰色である。

小　　結

以上、今回の調査結果を述べてきた。ここでは出土遺物の時期と遺構について記し、小結としたい。

ＳＫ－01より出土した弥生土器は、弥生時代前期から中期にかけてのものと考えられる。ＳＫ－02は、ＳＫ－01と隣接しており、掘り方・覆土中の黄褐色土層の類似から考えて、ほぼ同時期のものと推定される。ＳＩ－01では、床面及び覆土中より弥生土器の出土をみた。床面より出土した弥生土器は、藤田編年[註2]の山陰Ⅲ期に含まれ、弥生時代後期の遺物と考えられる。ＳＫ－04より出土の須恵器は、高広編年[註3]Ⅲ－Ｂ期に含まれ、７世紀後半の遺物と考えられる。ピット内から出土した須恵器は、高広編年Ⅳ－Ｂ期に含まれ、８世紀後半の遺物と考えられる。

今回の調査で検出した竪穴住居址は、前回に調査した平所遺跡の範囲より東側に位置している。このことより、遺跡の所在する範囲は従来考えられていたものよりかなり広いと推定される。さらに、尾根上からは弥生時代から奈良時代にかけての土壙も検出されており、斜面のみならず、尾根上にかけても遺跡が点在していることが判明した。茶臼山北側低丘陵から確認された竪穴住居址としては勝負遺跡[註4]があり、平所遺跡とほぼ同時期の住居址が確認されている。これまで、意宇川下流平野周辺の低丘陵地帯は古墳の存在がよく知られていたが、平所遺跡のように弥生時代の集落とそれに関連する遺跡が多く存在する可能性もあり、今後注意を要するものと思われる。

註

1．島根県教育委員会『国道９号線バイパスに伴う調査報告書Ⅱ』昭和52年

2．藤田憲司「山陰鍵尾式の再検討とその併行関係」『考古学雑誌64－４』昭和54年

3．島根県教育委員会『高広遺跡発掘調査報告書』昭和59年

4．島根県教育委員会『国道９号線バイパス建設予定地内埋蔵文化発掘調査報告書Ⅳ）昭和58年

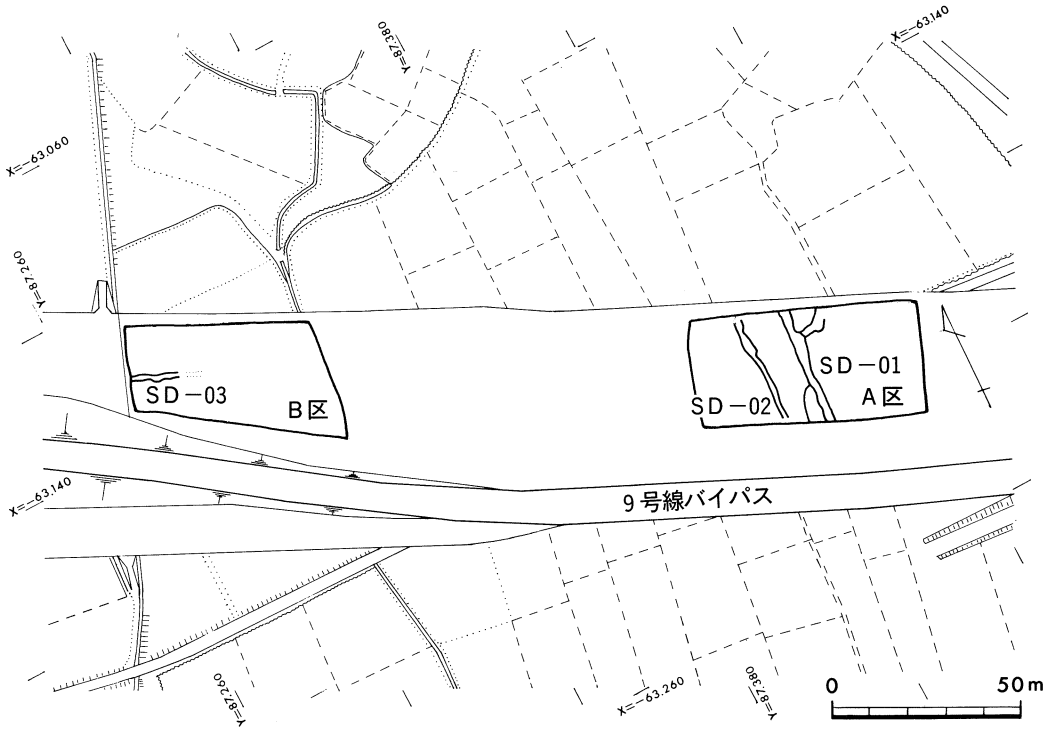
春 日 遺 跡

春日遺跡は意宇平野の東南端にあたる意宇川とその支流須田川に挟まれた湿田中にあり、２河川の合流地点の南約200mに位置している。

今年度の調査は昭和55、56年度の調査(註1)を参考にして調査区を設定し、須田川寄り（東側）の調査区をＡ区、意宇川寄り（西側）の調査区をＢ区とした。バイパス工事に関連して調査区内には耕作土上に約１mの客土があったため、まず調査開始前に重機により客土と大半の耕作土を除去し、その後人力によって遺構の精査を行なった。前回の調査では溝状遺構が確認されたが、これらが灰白色粘質土層上面から掘り込まれていたことから、今回はまず調査区南壁沿いに排水溝を兼ねたトレンチを入れ、土層を観察し遺構の確認に努めた。その結果、Ａ区では調査区のほぼ中央に南北に平行して走る２条の溝状遺構が検出され、Ｂ区では調査区西端に東西方向に走る溝状遺構を検出した。以下、各調査区ごとに遺跡の概要と検出遺構、遺物について記述する。

A 調 査 区

調査区内の土層堆積状況は、客土下に約40cmの耕作土がありその下には明灰色砂質土、灰白色砂



第15図　春 日 遺 跡 遺 構 配 置 図

質土、灰白色粘質土、黒色粘質土、灰色砂層がほぼ水平に堆積している。南壁セクションのほぼ中央に落ち込みが認められたため、その付近で灰白色粘質土層上面を精査した結果溝状遺構を検出した。その後重機掘削により調査区内の耕作土の残土を除去した際に、南壁セクションでは認められなかったがその西側にもう１条溝状遺構を検出した。

ＳＤ－01（第17図）

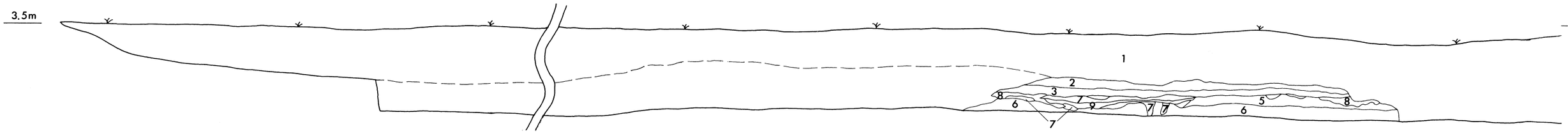
調査区のほぼ中央を南北方向に走る。平面形は直線状を呈し、西側は溝中央部から南端まで、東側は溝中央部で２段になっており、北東隅では幅２～５ｍの浅い落ち込みが続いている。この落ち込みは両肩が不規則に変化することから自然の水路の可能性もある。溝の規模は全長約40ｍ、幅約2.5～６ｍ、深さ約0.3ｍで、断面形は浅い皿状を呈する。また溝内の土層堆積状況は砂礫層、灰色粘質土層、黄褐色粘質砂層、黒灰色粘質土層の順に堆積しており、これらの堆積状況によるとこの溝は数回にわたり形を変えて流れたものと思われる。溝内の砂礫層下位（床面から10～20cm前後）からは弥生・土師器片、須恵器片、石器等が出土している。遺物の大半は弥生・土師器片であったが、２次的な堆積のものと思われ小片でかつ磨滅が著しいために図示できるものはごくわずかであった。須恵器も大半は破片の状態で出土したが、接合復元すると完形に近くなるものも出土した。

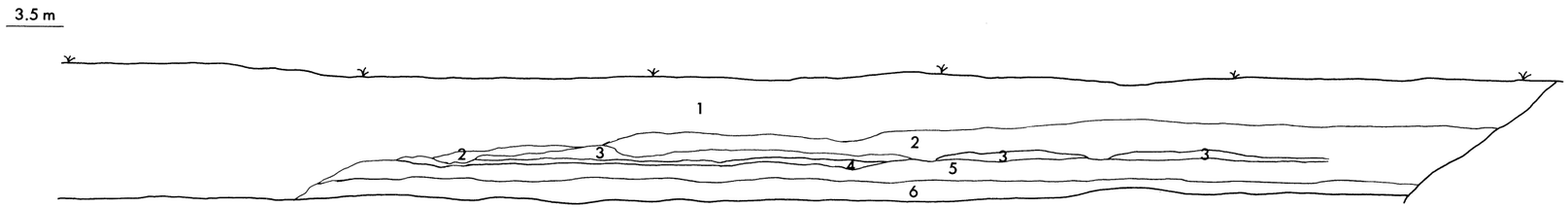
ＳＤ－01出土遺物（第18図）

弥生土器（３、４）　底部片である。いずれも胎土は２～３㎜大の砂粒を含み、焼成は良好で黄褐色を呈す。磨滅が著しく調整は不明であるが、４は外面に黒斑が認められ、その形態から前期壺形土器の可能性がある。復元底径は３が6.8cm、４が9.6cmを測る。

土師器（１、２）　いずれも甕形土器片であるが、１は口頸部が「く」字形に屈曲する。調整等の詳細は小片で風化が著しく不明である。胎土は３～５㎜大の小石を含み、焼成は良好で黄橙色を呈す。２も同様に口頸部が「く」字形に屈曲するものであるが１に比べ口縁部の器肉が厚い。調整は口縁部内外面にヨコナデ、頸部内面に指頭圧痕、ヘラケズリが認められる。胎土は１㎜大の砂粒を多く含み、焼成は良好で黄灰色を呈す。復元口径は１が20cm、２が15cmを測る。

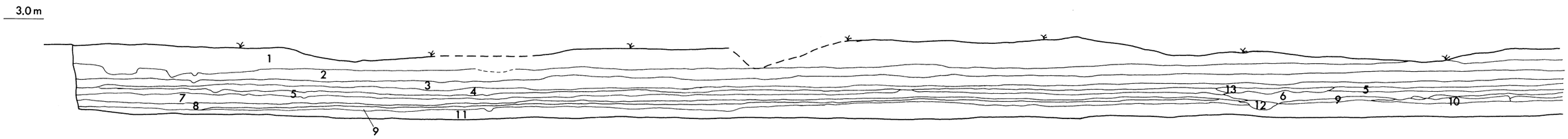
須恵器（５～12）　５は坏蓋で、口縁部はやや大きく開いて端部に丸みをもち、口縁部と天井部の境に沈線が１条施される。胎土は微砂粒を含み、焼成はやや良で白灰色を呈す。復元口径は15cmを測る。６はほぼ完形に復元された。口縁部と天井部の境がやや不明瞭であり、天井部はわずかに丸みをもつ。調整は口縁部が回転ナデ、天井部外面は回転ヘラケズリ、内面はナデが施される。胎土は２㎜以下の砂粒を多量に含み、焼成は良好で青灰色を呈す。口径11cm、器高4.4cmを測りやや小形のもので短頸壺の蓋の可能性がある。７は坏蓋で、口縁部は内湾して、端部が丸く終わる。胎土は密で、焼成は良好で白灰色を呈す。復元口径は11.6cmを測る。８～11は坏である。８は高台付

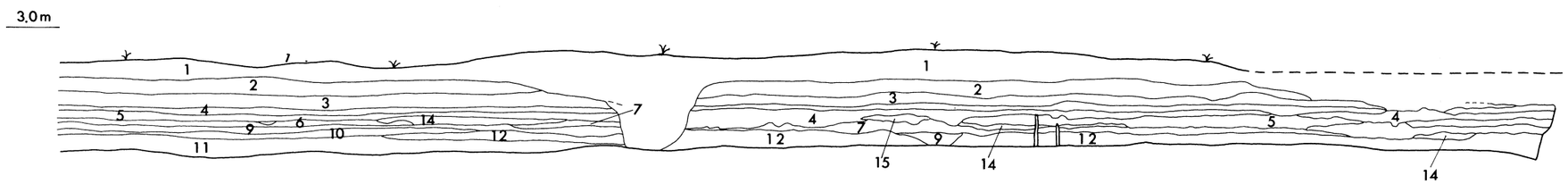




A区

1．盛土
2．耕作土
3．明灰色砂質土
4．灰白色砂質土
5．灰白色粘質土
6．黒色粘質土
7．灰色砂
8．白色砂
9．茶褐色粘質土





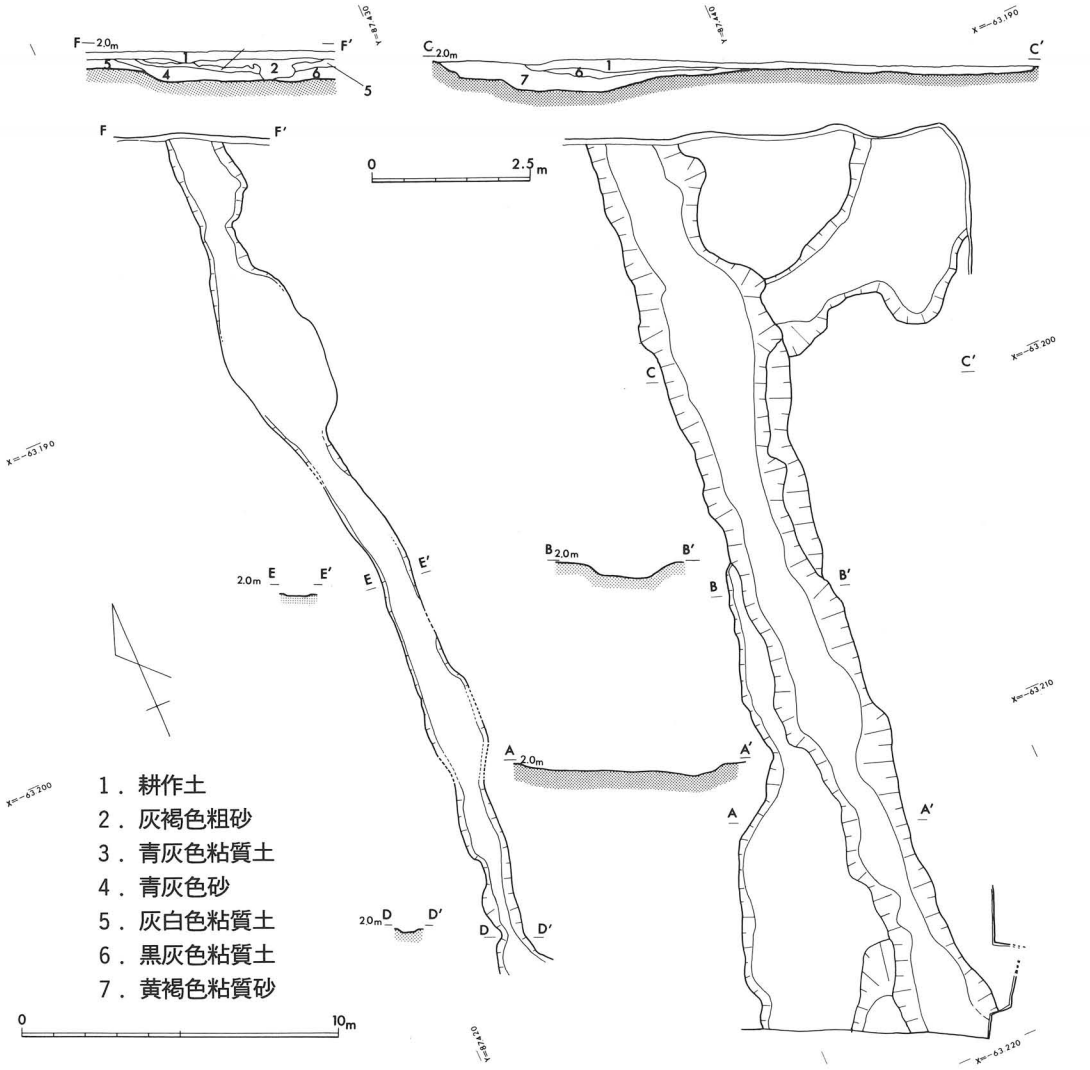
B区

1．盛土
2．耕作土
3．灰色土
4．灰白色土
5．灰白色粘質土
6．暗灰色粘質土
7．黒色粘質土
8．暗茶色粘砂土
9．灰白色砂
10．暗茶褐色粘砂土
11．黒色粘砂土
12．黒茶色粘質土
13．明灰色粘砂土
14．白色砂

0 4m

第16図　春日遺跡調査区南壁土層断面図

坏で、体部は内湾して立ち上がる。高台は外方に開き、端部は丸みをもつ。調整は外面が回転ナデ底部内面はナデが施される。底部は静止糸切りの後かるい回転ナデが施される。胎土は３㎜以下の小石を若干含み、焼成は良好で明青灰色を呈す。復元底径は9.2cmを測る。９は高台をもたず、底部から口縁部にかけて内湾するもので、端部はやや薄く先端は丸みをもつ。調整は内外面に回転ナデ、底部内面にナデが施される。底部は回転糸切りの後未調整である。胎土は密で、焼成は良好で青灰色を呈す。復元口径は13.4cm、復元底径は8.4cm、器高４cmを測る。10、11は無高台の坏である。調整はいずれも回転ナデ、底部は回転糸切りの後未調整である。胎土は１～２㎜大の砂粒を含み、焼成は良好で青灰色を呈す。いずれも復元底径は7.8cmを測る。５～11いずれもロクロの回転は右回りである。12は高坏の脚部で、端部の屈曲がやや大きく、下端はつまみ出された形態を呈す。



第17図　春日遺跡Ａ区ＳＤ－01、02　実測図

透孔の部分が若干残っているがその形態は不明である。胎土は微砂粒を含み、焼成は良好で淡青灰色を呈す。また外面に自然釉が付着し、復元底径は10.9cmを測る。

敲石（13）　こぶし大よりやや大きめの河原石で、片面中央部と側面に広く敲打痕が認められる。また器面全面に擦痕が認められ磨石としても使用されたものと思われる。

ＳＤ－02（第17図）

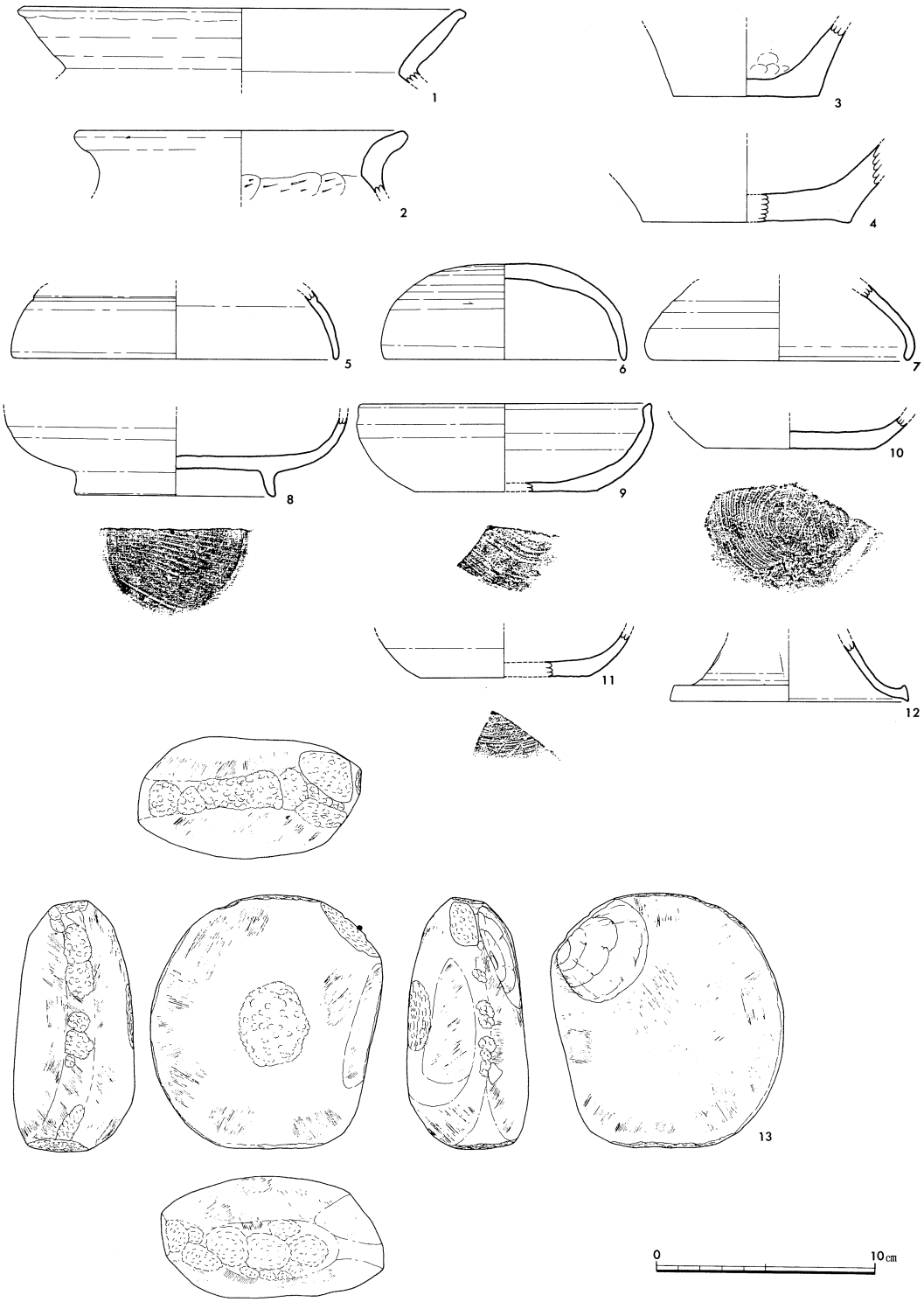
ＳＤ－01より西側へ約10mの所にそれと平行して位置する。重機掘削により灰白色粘質土の大半を削り取られたため原形を窺うことはできなかったが、平面形は直線状を呈し、その規模は全長約40mを測る。北壁セクションの観察によると本来の幅は約3.4m、深さ約30cmを呈し断面形は浅い皿状をなすものと思われ、北側がやや深くなっている。覆土は北壁セクションでは上から灰褐色粗砂、青灰色粘質土、青灰色砂層の３層で、青灰色砂層中から弥生土器もしくは土師器と思われる土器片が４点出土したがいずれも小片で磨滅が著しく図示し難いものであった。ＳＤ－02も01と同様にその南北端ともに調査区外に続くものと思われる。

Ａ区耕作土出土遺物（第19図）

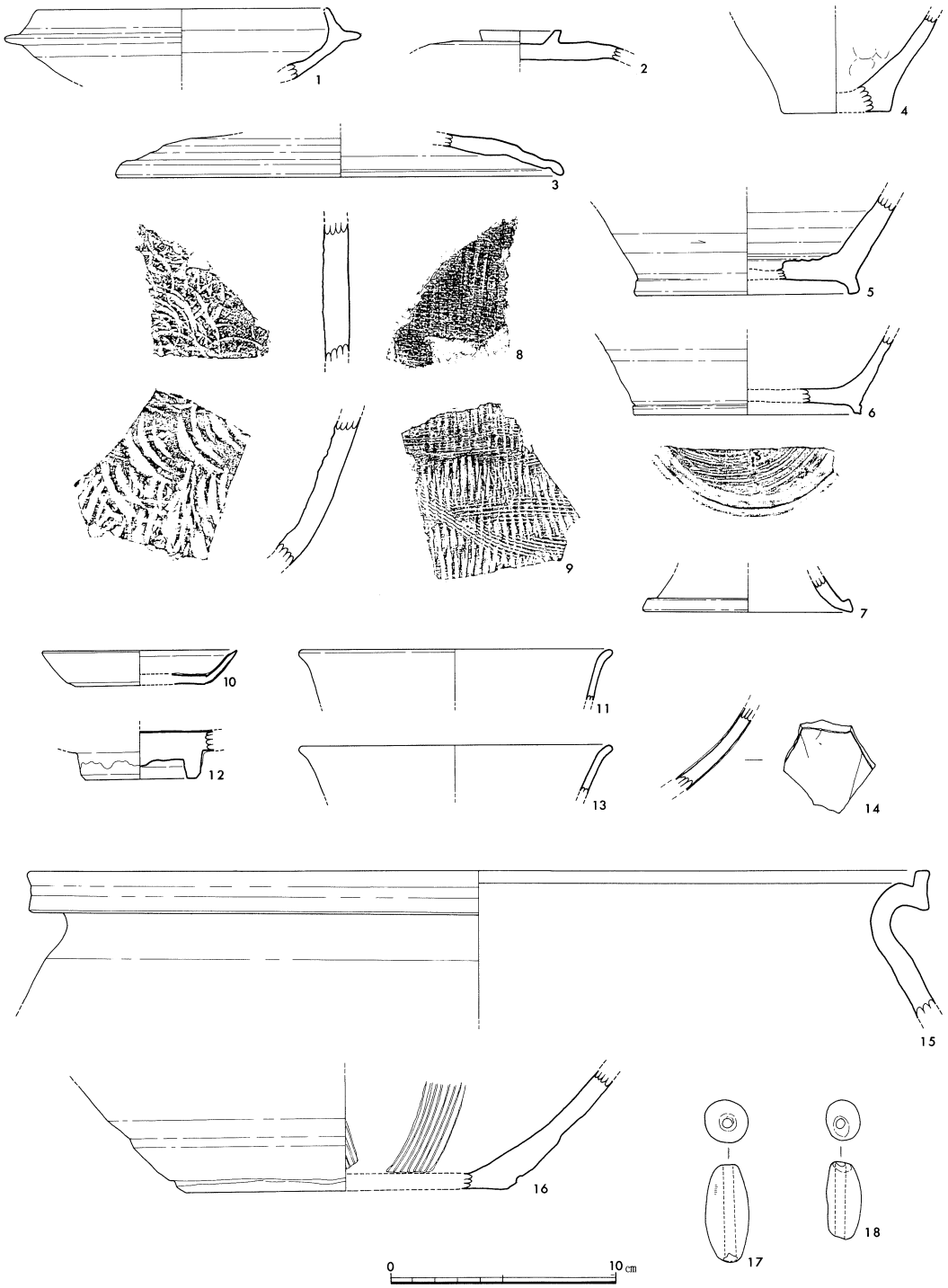
弥生土器（４）　底部片である。調整等は磨滅が著しく不明であるが、胎土は１㎜大の砂粒を含み、焼成は良好で赤褐色を呈す。復元底径は4.8cmを測る。

須恵器（１～３、５～９）　１は坏身である。口縁部はやや内傾して立ち上がり、端部は丸みをもち、受部は水平に突出する。胎土は密で、焼成はやや不良で白黄色を呈する。復元口径は13cmを測る。２、３は坏蓋である。２は輪状つまみを有するもので、つまみの外側は回転ヘラケズリの後回転ナデが施される。３は口縁端部がやや屈曲するもので、かえりはもたない。いずれも胎土は密で、焼成は良好で青灰色を呈す。３は復元口径20cmを測る。５、６は高台付坏である。５は底部外周部に外方へ開く低い高台を有するもので、体部は直線的に立ち上がる。調整は内外面に回転ナデが施される。底部は回転糸切りの後ナデが施されるものと思われる。６は５と同様の形態を呈すがやや器肉の薄いものである。調整は回転ナデが施され、底部は回転糸切りの後未調整である。いずれも胎土は２㎜大の砂粒を含み、焼成は良好で青灰色を呈す。復元底径は５が10cm、６が10.2cmを測る。７は高坏の脚部で、端部がつまみ出され平坦面をなす。復元底径は9.4cmを測る。８、９は甕の胴部片である。外面はいずれも平行のタタキ目文、内面には同心円文が残る。９は外面にカキメも認められる。

輸入陶磁器（10～14）　10は白磁の小皿で、口縁端部が口禿になっている。釉は底面を除きやや厚めにかかり、空色をおびた白色を呈す。大宰府出土の陶磁器分類のⅨ類(註２)に比定されるものと思われ、復元口径8.7cm、器高1.55cmを測る。11～14は龍泉窯系の青磁碗と思われる。11、13は口縁端部は外反して先端が丸くおさまっている。12は高台が断面四角形を呈し、底部の器肉が厚い。施釉



第18図　春日遺跡Ａ区ＳＤ－01　出土遺物実測図



第19図　春日遺跡A区耕作土出土遺物実測図

は高台畳付部とその内面には施されず露胎である。また内面見込み部には花文のスタンプが認められる。14は体部外面に蓮弁文様が施されるもので大宰府Ｉ－５類に比定される。11～14はいずれも釉色は青味を帯びた緑色を主体とする。

国産陶磁器（15、16）　15は常滑系の甕である。内外面に自然釉が付着し、釉のみられない部分は赤茶色を呈す。胎土は密で、焼成は良好で堅固である。復元口径は約40cmを測る。16は擂鉢である。須恵質の土器で内面に自然釉が付着し、７本単位の条痕が認められる。調整は雑な回転ナデが施され、焼成は良好である。復元底径は15cmを測る。

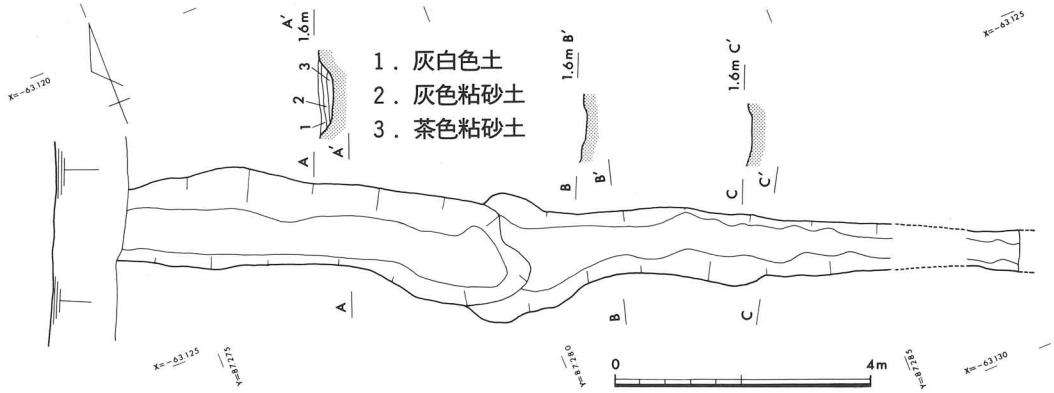
土錘（17、18）　いずれも赤褐色を呈し、焼成はやや良である。17は全長4.4cm、最大径約２cm、重量約13ｇを測り、18は全長3.4cm、最大径約1.7cm、重量約７ｇで、いずれも径４㎜の孔が穿けられている。

Ｂ調査区

調査区内の土層堆積状況は、客土下に耕作土が約40cm程ありその下に灰色土が約40cm、続いて厚さ10～20cm程度で灰白色土、灰白色粘質土、暗灰色粘質土、黒色粘質土、暗茶色粘砂土、灰白色砂、暗茶褐色粘砂土、黒色粘砂土層がほぼ水平に堆積している。南壁セクションには遺構の可能性のある落ち込み等が認められなかったため灰白色粘質土層上面まで重機により除去し、その後人力によって精査した。その結果、黒色粘質土上面で溝状遺構を検出した。

ＳＤ－03（第20図）

調査区西端に東西方向に走る。平面形は直線状を呈し、中央やや西寄りから西端へ向けて段状に落ち込んでいる。その規模は全長約13.5m、幅0.6～２ｍを測り、深さは東側で約10cm、西側で約20cmで断面形は浅い皿状を呈する。溝内の堆積土層は西側で３層あり、下から茶色粘砂土、灰色粘砂土、灰白色土の順に堆積しており、東側では灰白色土一層であった。溝内からは中央部の茶色粘



第20図　春日遺跡Ｂ区ＳＤ－03　実測図

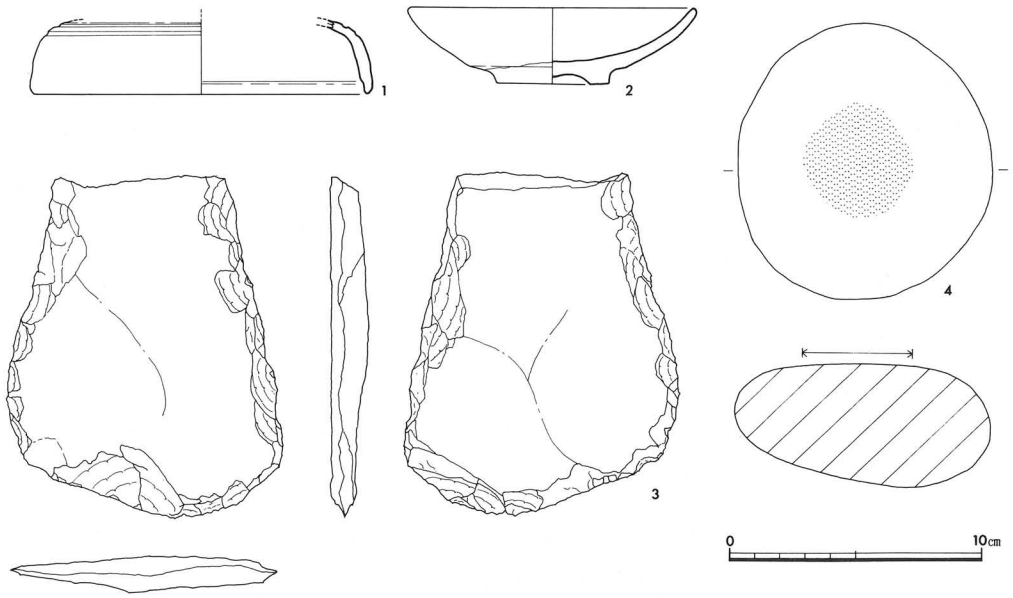
砂土中より土師器片が２点出土したにとどまった。

Ｂ区耕作土出土遺物（第21図）

土師器片、須恵器片、石器等が出土したが図示できたものは極めて少なかった。１は坏蓋である。口縁部はやや内傾して立ち上がり、天井部との境に２条の沈線が施されている。また口縁部内面には小さな段が設けられている。胎土は密であり、焼成は良好で明青灰色を呈す。復元口径は13.5cmを測る。２は唐津系の皿である。体部はゆるく内湾しながら立ち上がり、高台は低い。釉色は黄緑色を呈し、高台とその周辺には施釉されていない。調整は高台部とその周辺に回転ヘラケズリが認められ、内面見込み部には目当痕がみられる。復元口径は11.6cm、底径は4.6cm、器高は３cmを測る。３は石鍬である。平面形は台形を呈し、頭部は欠損している。扁平な石材を使用し、側縁部、刃部ともに両面から大まかな剝離を施しており大部分は自然面を残している。現存長13.6cm、厚さ約1.5cm、刃部最大幅11cmで剝離面は紫灰褐色、自然面は暗赤褐色を呈す。４はこぶし大の河原石で、片面中央に使用痕が認められることから台石とも考えられる。

小　　結

ここでは、今回行なった調査の結果を記し、小結としたい。Ａ区ではＳＤ－01、02の２条の溝状遺構が検出された。ＳＤ－01の砂礫層からは弥生・土師器片を中心に須恵器等が混在して出土したが、これらはその出土状況からみて本溝に直接関係するものではなく、河川の氾濫等により堆積し



第21図　春日遺跡Ｂ区出土遺物実測図

たものと思われる。出土遺物のうち第18図５～11の須恵器の時期は５、６が山陰須恵器編年Ⅲ期[註3]、７がⅣ期、８は柳浦編年第３式[註4]、高広編年ⅢＢ期[註5]に、９～11は柳浦編年第４式、高広編年ⅣＡ期に相当するものでＳＤ－01はその出土遺物からみて奈良時代ごろまで下る可能性もあるが詳細な時期を知ることはできなかった。ＳＤ－02は出土遺物が極めて少なかったが、01と同様に灰白色粘質土上面から検出されたことによりＳＤ－01とほぼ同時期のものと思われる。また前回の調査ではＡ区付近でＳＤ－02が検出されおり[註6]この溝状遺構は①検出した地点が今回のＳＤ－01と近接している。②構の方向が一致している。③灰白色粘質土上面で検出された。④構内に砂礫が堆積している。⑤出土した須恵器が概ね奈良時代のものである。などのことから今回のＳＤ－01と同一の遺構である可能性が大きいと言える。Ｂ区ではＳＤ－03が検出されたが、これはＡ区の遺構検出面の下層にあたる黒色粘質土上面で検出されたことからＳＤ－01、02よりやや古く位置づけられる可能性もある。またＢ区付近でも前回ＳＤ－01が検出されたが、今回その続きを検出することはできず本遺構は今回の調査区まで延びていないことが判明した。

当遺跡は、溝状遺構内で検出された砂礫が灰白色粘質土あるいは黒色粘質土上面にも広く認められること、黒色粘質土下には砂礫層が厚く堆積していることなどからみてたびたび意宇川、須田川の氾濫を受けたものと思われ集落としては立地的に不適当といえる。よって当時の人々の生活の場はこれより上流域にあったものと思われ、今回検出した遺構は何らかの生産その他に関係するものと考える方が適当と思われる。

次に各調査区耕作土から出土した土器の時期について若干触れておくことにする。第19図１と第21図はその形態的特徴からみて山陰須恵器編年Ⅲ期に、第19図３、５、６は柳浦編年第４式、高広編年ⅣＢ期に相当する。第19図10～16、第21図２の陶磁器は、10～14がいずれも13世紀中葉～14世紀に相当する[註7]。また15は鎌倉期に[註8]、16は室町期に[註9]比定され、第21図２は17世紀代のもの[註10]と思われる。

以上、今回の調査では時期を明確に把握できる遺構は検出できなかったが、ＳＤ－01が前回の調査の溝状遺構と同一のものである可能性をもち、ＳＤ－01、02いずれも調査区外に延びることが確認された。今回の調査で得られた資料はごくわずかであるが、今後意宇平野の古代史を考える上で１資料となるものである。

註

１．島根県教育委員会・建設省松江国道工事事務所「Ｉ春日遺跡」『国道９号線バイパス予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅳ』　昭和58年

２．九州歴史資料館『九州歴史資料館研究論集４』　昭和53年

３．山本　清「山陰の須恵器」『山陰古墳文化の研究』　昭和46年

４．柳浦俊一「出雲における歴史時代須恵器の編年試論」『松江考古３号』　昭和55年

5．島根県教育委員会『高広遺跡発掘調査報告書』　昭和59年
6．註1に同じ
7．註7に同じ
8．沢田由治『常滑　越前　陶磁大系7』　平凡社　昭和48年
9．東京国立博物館『特別展日本の陶磁』　昭和60年
10．島根県教育委員会『富田川』　昭和59年

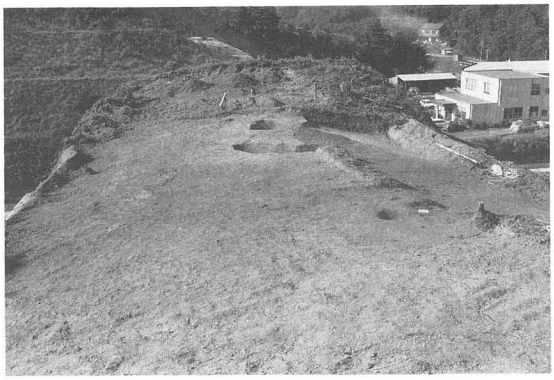
平所遺跡遠景（西より）

平所遺跡ＳＩ－01（西より）

S.I－01　遺物出土状態

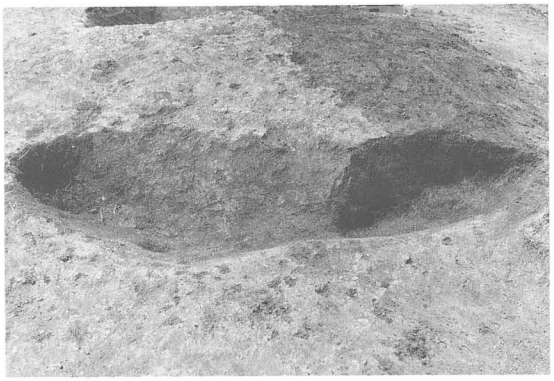
ＳＩ－01　内土層堆積状況

図版２



ＳＫ－01、02、Ｐ－01（北より）

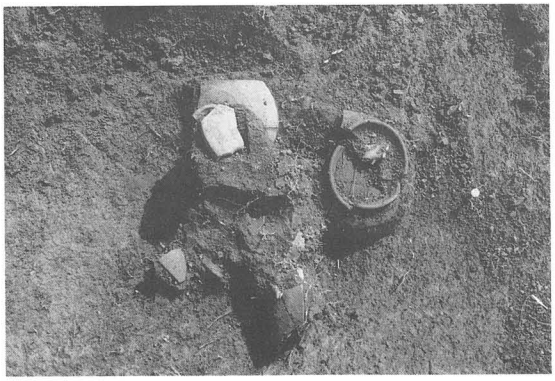
ＳＫ－01（南より）



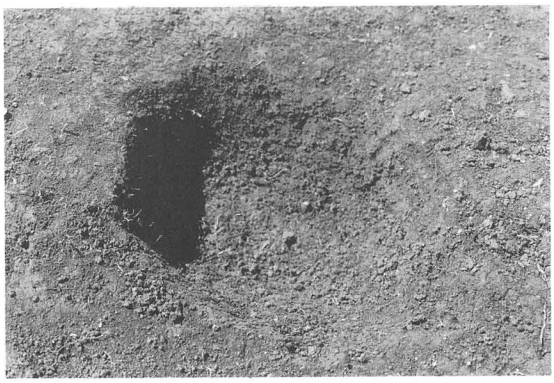
ＳＫ－02（北より）

ＳＫ－03（南より）

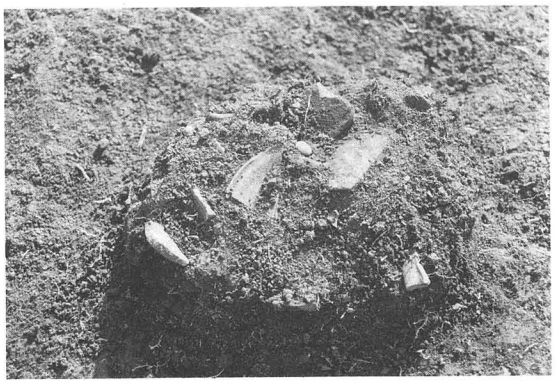
ＳＫ－04（東より）



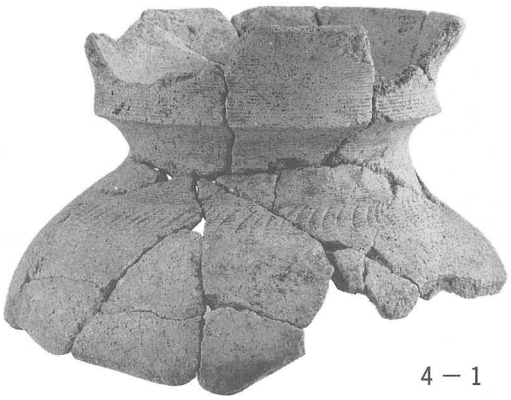
ＳＫ－04（西より）



Ｐ－01（北より）

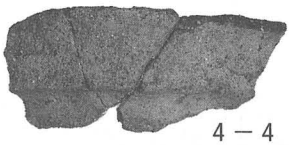


Ｐ－01（東より）

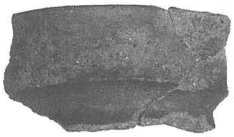


4－1

4－3

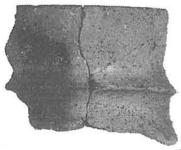


4－4

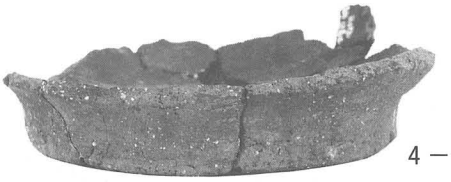


4－5

5－1



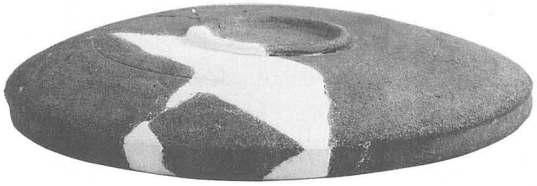
4－6



4－2

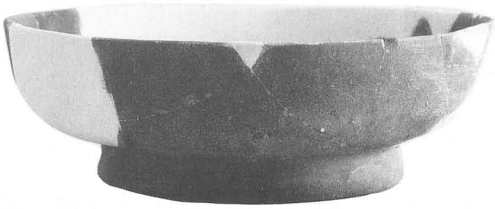
7－1

4－7

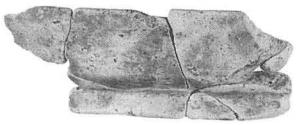


11－1

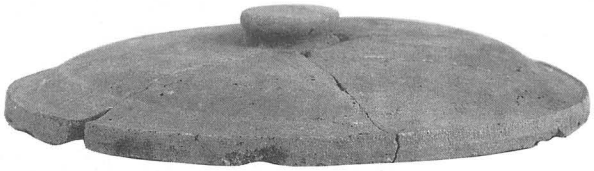
13－1



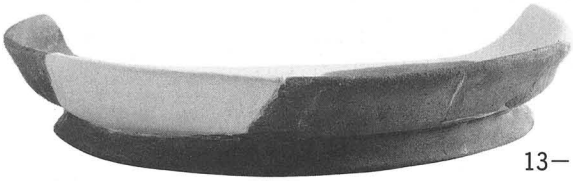
11－2



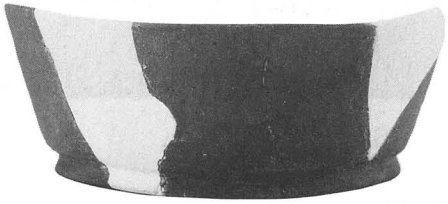
13－2



13－3



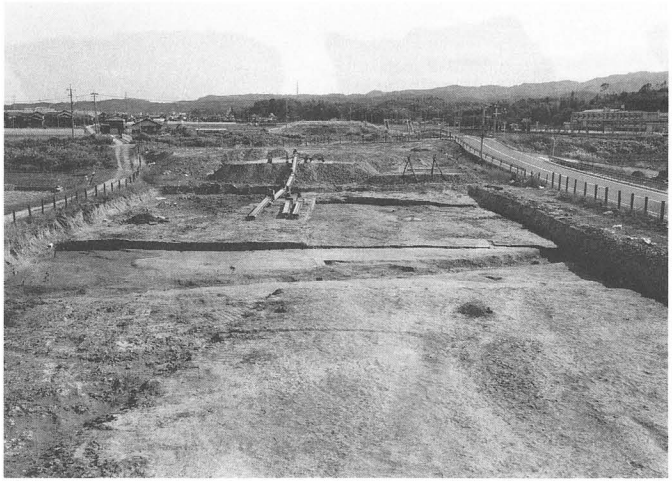
13－4



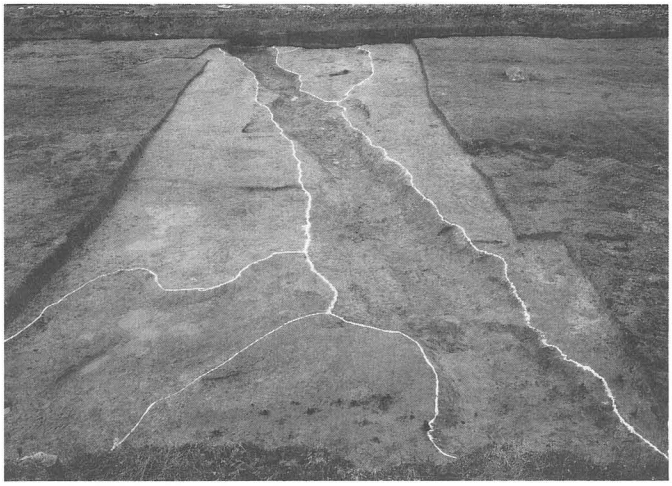
13－6

平　所　遺　跡　出　土　遺　物

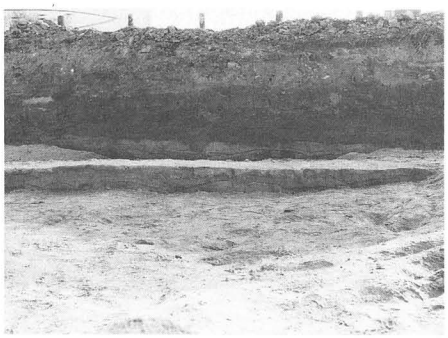
図版４



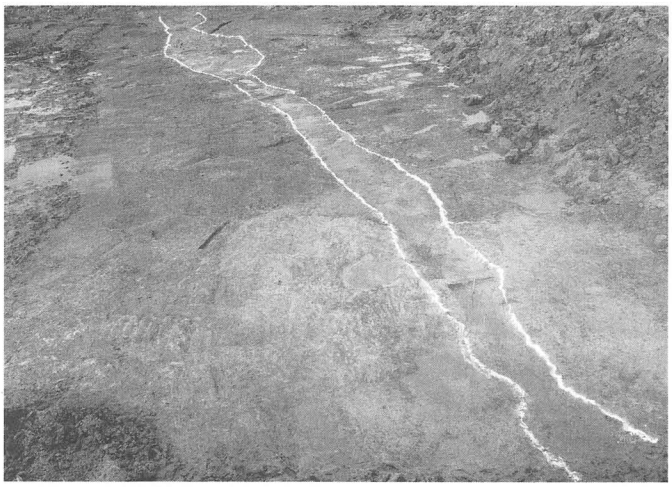
春日遺跡Ａ区全景（西より）



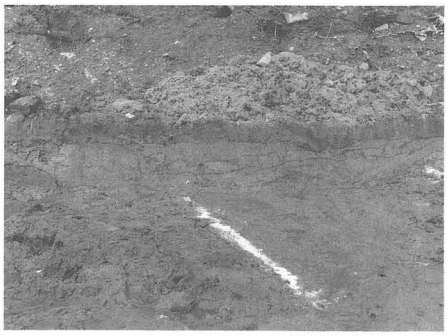
ＳＤ－01（北より）



ＳＤ－01　南側土層堆積状況

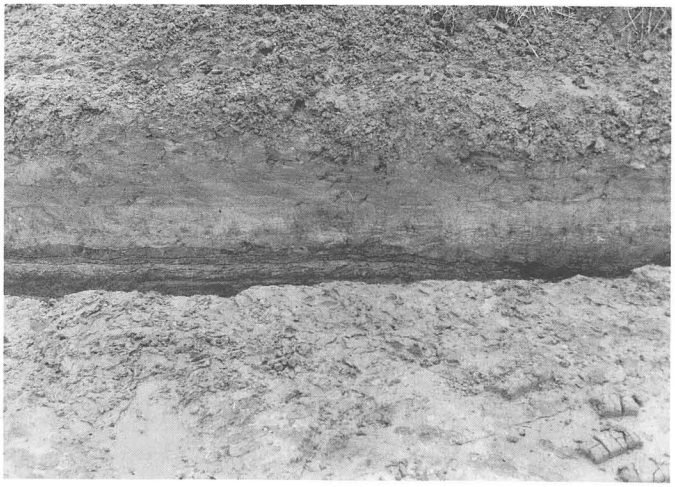


ＳＤ－02（南より）

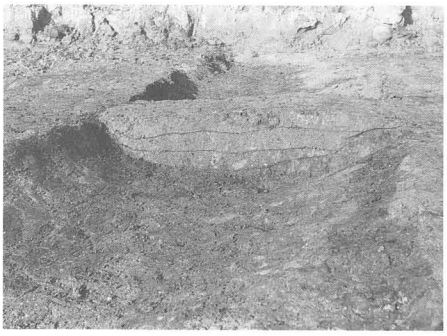


ＳＤ－02　北壁土層堆積状況

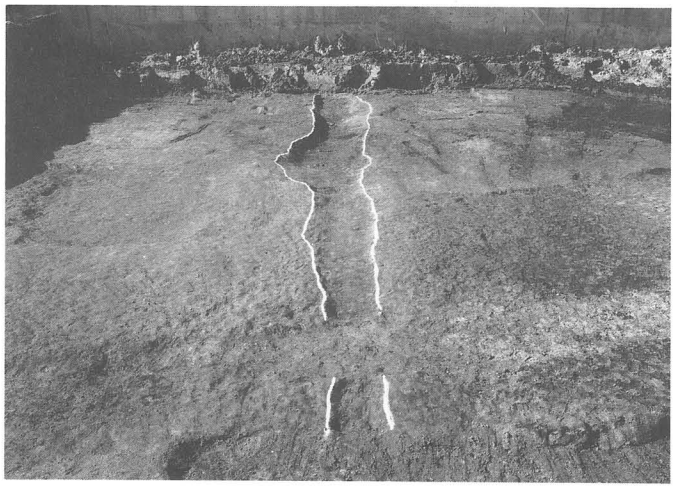
春日遺跡Ｂ区全景（東より）



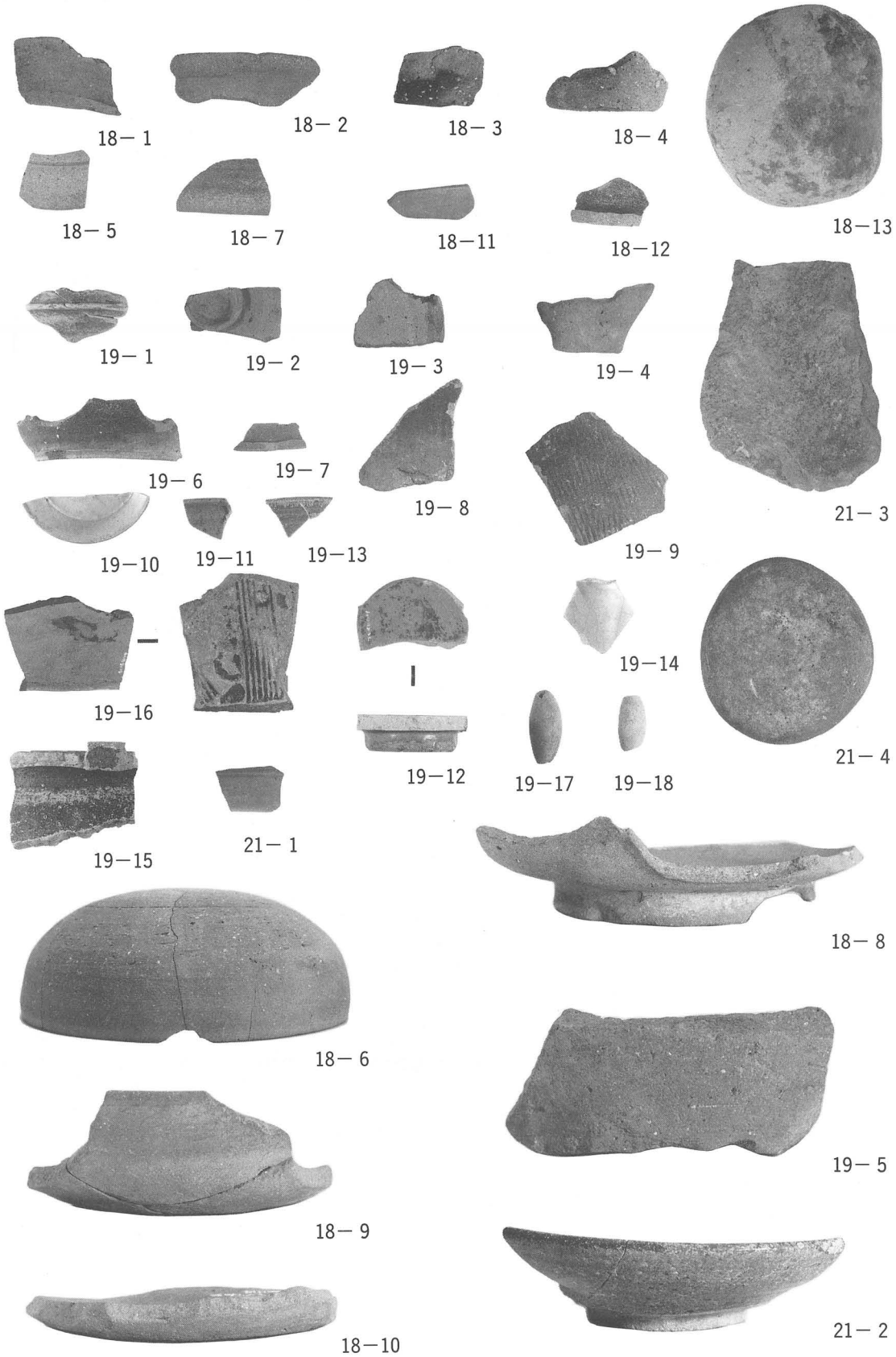
調査区中央部南壁土層堆積状況



ＳＤ－03　西側土層堆積状況



ＳＤ－03（東より）


18－1
18－2
18－3
18－4
18－13
18－5
18－7
18－11
18－12
19－1
19－2
19－3
19－4
19－6
19－7
19－8
19－9
21－3
19－10
19－11
19－13
19－16
19－14
21－4
19－12
19－17
19－18
19－15
21－1
18－8
18－6
19－5
18－9
21－2
18－10

春　日　遺　跡　出　土　遺　物

国道９号線バイパス建設予定地内

埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅴ

発行　昭和６２年３月

編集　島根県教育委員会
松江市殿町１番地

印刷　（有）黒潮社
松江市向島１８２